

「出張行ってきました」

今年で3年目となる海外研修は、やる気に満ちあふれた5名の研修医を引き連れての出発となりました。(引率 小林慎)

サンディエゴでの視察病院は先進医療と救急を担うSharp Memorial Hospitalです。Oncology NurseのMs.Baechrensの案内で、救急部門、一般病棟、ICU、患者サービス部門などを見学しました。病室はすべてが個室で、プライバシーへの配慮はもちろんオーダーメイドのサービスも充実していました。精神的なケアにはアニマルセラピーも導入されています。保険制度の差はあるものの、患者サービスが充実したアメリカ医療を自分の目で確認でき非常に勉強になりました。(堀口雄平)



ロサンゼルスでは南カリフォルニア大学ノーリス総合がんセンターを訪問しました。Patient Experience ManagerのMs. Aldereteがエントランスで我々を歓迎してくれました。がん治療専用の病棟と放射線治療センターの見学では、最新の治療設備はもちろんのこと、内装やBGMなど患者をリラックスさせるための環境整備にも感心させられました。ネイティブスピードの英語に苦戦しつつ、癌治療に対する姿勢の素晴らしさを実感できました。(山川司)



カリフォルニア大学サンディエゴ校では晴れ渡った青空の下で学生たちも生き生きとしており、ホバーボード(電動スケボー)で移動する学生も見かけました。南カリフォルニア大学ロサンゼルス校の見学は夜8時を過ぎていましたが、ネオンライトに照らし出されたモダンな校舎が点在するなか、多くの学生たちが意欲的に活動している姿に驚きました。(畑中智貴)

サンディエゴでは、南カリフォルニア大学教授の岩城裕一先生(函館生まれ 札幌医科大学卒)と米国在住の松田和子先生(小児科医 札幌医科大学卒)と会食する貴重な機会を得ました。岩城先生は国内外で重職にありながらも非常に物腰が柔らかく、若輩の私たちにも気さくに接してくださいました。また、松田先生からは米国でのレジデント生活の話などを楽しく伺うことができました。アメリカという異国の地で自分を見失わず、夢に向かって努力する先輩達の生き様を目の当たりにし、この広い世界で自分に限界を決めずに挑戦することの素晴らしさを実感したひとときでした。(三宅高和)



今回の海外研修ではアメリカの医療・文化をリアルに感じたと同時に言葉の壁で何もできない自分達の不甲斐なさも痛感しました。激動の1週間ではありましたが、自分を見つめなおす良いチャンスとなりました。教科書やインターネットでは絶対に感じ得ない現場の空気、におい、患者や家族のまなざしや息づかいが、私たちの心に強く残っています。ほかでは体験できない貴重なプログラムをセッティングし、私たちの背中を押してくださった五病の皆さまに心より感謝します。(佐々木彩花)